

シリーズ研究の周縁より

# 新しく寄託された「横井小楠関係文書」について

三澤 純

## 1. 「横井小楠関係文書」とは？

横井小楠（1809～1869）は、肥後藩士で、幕末維新期を代表する儒学者・政治家である。一般に、彼の存在は、第一に幕末の肥後藩内において実学党と呼称される思想・政治集団の中核となること、第二に越前藩主松平慶永（春嶽）に招聘され、同藩の藩政改革の支柱となること、第三に成立したばかりの明治新政府の参与に就任すること、という諸側面において、よく知られている。

2007年11月に熊本大学に寄託された「横井小楠関係文書」は、横井小楠の曾孫横井和子氏（大阪教育大学名誉教授、兵庫県芦屋市在住）の所蔵にかかる全341点の古文書・古記録類（一部、写真等を含む）である。本史料の大元は、一時期、横井家の親戚柳瀬家に預けられていた史料群で、1999年夏に堤克彦氏によって仮目録の作成が行われている（その状況は、堤氏が「横井小楠をめぐ

る新書翰」〔『熊本近研会報』第356号、2001年1月〕で詳しく述べている）。その後、この史料群は、横井氏によって三つに分割され、いずれも小楠に縁の深い熊本市（熊本市立横井小楠記念館）・福井市（福井市立郷土歴史博物館）・京都市（京都市歴史資料館）に寄託された。今回、熊本大学に寄託されたものは、そのうちの熊本市分である。本史料が熊本大学に移された背景についてはここでは触れないが、私個人としては、本史料は当初の寄託先にあることが望ましいと考え、そうなるための努力をしてきたことだけを書き記しておきたい。ともあれ昨年11月26日に、横井和子氏が来学され、附属図書館地下の貴重書庫内における本史料の保管状況を実際にご覧になり、大いに安心されたことを喜びたい。

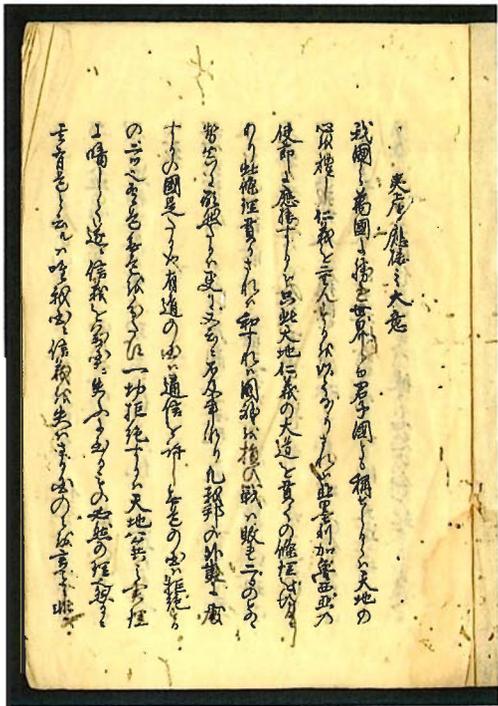
## 2. 展示・公開の必要性

今後、熊本大学としては、本史料を専門研究者の閲覧に供するだけではなく、学生・院生、また広く市民の皆さんに対しても公開していかねばならないと考えている。その第一弾として、昨年11月、熊粹祭やホームカミングデーに合わせて、以下の二点の史料を紹介するミニ展示を行った。

- A 「夷虜応接之大意」（嘉永6年、写本）
- B 「熊本の家族宛横井小楠書翰」（慶応4年5月24日付）

夷虜応接之大意

我国之万国に勝れ、世界ニ而君子国とも称せらるゝハ天地の心を体し仁義を重んずるを以てなり。されハ亜墨利加・魯西亜の使節に應接するも只此天地仁義の大道を貫くの條理を得るニあり。此條理貫かされハ、和すれハ国体を損ひ戦ハ破れ、二ツのもの、勢真ニ頭然たるハ更に又云ニ不及事なり。凡我國の外夷に処するの国是たるや、有道の国ハ通信を許し無道の国ハ拒絶するの二ツ也。有道無道を分たす一切拒絶するハ天地公共の実理に暗して、遂に信義を万国ニ失ふに至るもの必然の理也。然るニ其有道と云ルハ唯我国ニ信義を失ハざる国のミを言ことニ非ス



図版 A 夷虜応接之大意(部分)

以下、二つの史料の概要を紹介しておきたい。

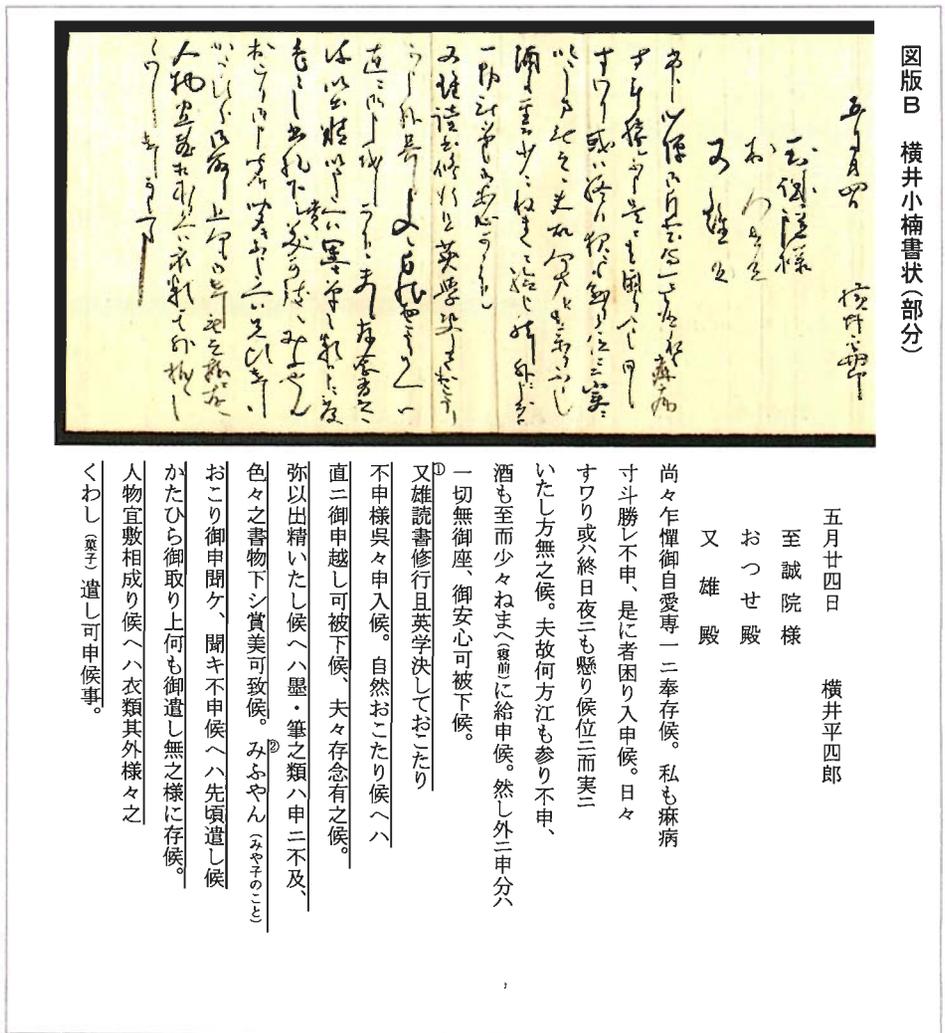
図版Aは、嘉永6年6月3日（西暦では1853年7月8日）にアメリカ使節ペリーが浦賀へ、7月18日（西暦では8月22日）にロシア使節プチャーチンが長崎へ来航したことを踏まえ、横井小楠が、今後増えていくであろう外国勢力との対応指針をまとめた「夷虜応接大意」の写本である。ここで展開される議論の支柱は、「有道の国は通信を許し、無道の国は拒絶する」（前ページの図版Aの傍線部①）というものであった。すなわち日本に接触してくる外国勢力が「仁義を重んずる国＝有道の国」であれば国交を開き、「無道の国」であればその要求を拒絶するという意味である。これは、単に「鎖国」か「開国」かという論争に明け暮れていた当時の政治情勢においては、極めて冷静かつ現実的な献策であった。加えて小楠は、この指針を世界的な対外行動規範とすることを通じて、「天地公共の実理」（＝公平・平等な世界秩序。傍線部②）を構築しようとしていた。近年、人文・社会諸科学において「公共哲学」というキーワードがクローズアップされている中で、この「夷虜応接大意」は、国際的にも特に注目されている著作である。

図版Bは、明治新政府の参与という重職に就き、京都に移り住んだ小楠が、その直後に熊本の家族宛に書き送った書翰である。

この書翰で、小楠は、新政府内での自分の仕事場の様子を、事細かく、

熊本の家族たち、即ち兄嫁の「至誠院」、妻の「つせ（津世）」、長男の「又雄」（後に牧師・政治家として活躍する横井時雄）に宛てて説明している。特に若き明治天皇（この時は満15歳）について詳しく記しており、彼が座る玉座の様子や彼の風貌に間近で接した感想を、感激一杯の筆致で伝えている。

また家族一人ひとりへの気遣いも忘れずに見せており、兄嫁には煙草入れを特注しているのも楽しみに待っていて欲しいと書き送っている。またこの時、満10歳の又雄には、又雄が獲って送ってくれた川海老を食べた礼が記されている。この川海老は、おそらく熊本の自宅（現在の熊本市沼山津の四時軒）前を流れる秋津川で獲ったものを、つせが佃煮にして送ったのであろう。さらに又雄に対して、「読書修行且英学」を一生懸命にやれ



図版B 横井小楠書状(部分)

五月廿四日 横井平四郎

至誠院様

おつせ殿

又雄殿

尚々乍憚御自愛專一ニ奉存候。私も痲病寸斗勝レ不申、是に者困り入申候。日々

すワリ或ハ終日夜ニも懸り候位ニ而美ニ

いたし方無之候。夫故何方江も参り不申、

酒も至而少々ねまへ(無)に給申候。然し外ニ申分ハ

一切無御座、御安心可被下候。

又雄読書修行且英学決しておこたり

不申様呉々申入候。自然おこたり候へハ

直ニ御申越し可被下候。夫々存念有之候。

弥以出精いたし候へハ墨・筆之類ハ申ニ不及、

色々之書物下シ賞美可致候。みふやん(みや子の)こと

おこり御申聞ケ、聞キ不申候へハ先頃遣し候

かたひら御取り上何も御遣し無之様に存候。

人物宜敷相成り候へハ衣類其外様々之

くわし(重子)遣し可申候事。

ば、「墨・筆はもちろん、ご褒美に色々な書物を贈ってやる」とか（図版Bの傍線部①）、当時満5歳の長女みや（後に海老名弾正の妻となる横井みや子）に対して、「母親の言うことを聞かなければ、先日贈った『かたびら』（単衣の夏服）は取り上げる。言うことをよく聞けば、新しい着物に加えてお菓子も贈ってやる」（傍線部②）と書いている箇所からは、幼子を熊本に残し、遠く離れた京都に「単身赴任」している父親の気持ちを十分に感じることができる。

今後は、本史料の確定版目録を作成することを目指して、再整理を行いつつ、その過程で得られた新しい知見を、附属図書館主催の貴重資料展等の機会を利用して展示・公開していきたいと考えている。

### 3. 横井小楠の新全集刊行へ向けて

本史料の特徴は、横井小楠への来翰（諸氏が小楠へ書き送った手紙）と小楠の発翰（小楠が諸氏へ発した手紙。その控えも含む）がその中心となっていることである。現段階で横井小楠研究の基本資料とされている山崎正薫編『横井小楠 遺稿編』には多くの小楠の発翰が収録されているが、来翰は一部の例外を除いて全く載せられていない。当然のことだが、書翰史料には往復双方の書翰を読んで、初めて理解される事柄が多いから、来翰の調査は、本格的な研究にとっては欠かせない作業となる。

例えば、『横井小楠 遺稿編』に収録されている澤田良蔵（尾張藩士）や岡田準介（越前藩士）に宛てた発翰から、小楠が、実際のペリー来航前に、それを知っていたことが分かっているが（特に、嘉永6年5月3日付の岡田準介宛書翰では、「近来は西洋之変動、其沙汰紛々としてこれあり、定て夏中には浦賀へ参り申すべく候」と書いており、小楠が入手していた情報が時期・場所ともかなり正確なものであったことを知ることができる）、そういう情報がどこから小楠のもとへもたらされたのかは全く闇の中であった。しかし今回の寄託史料中には、その情報源である可能性が高い来翰

も含まれている。

私の研究室に事務局を置いている全国横井小楠研究会では、現在、『横井小楠全遺稿集成』（仮称）を編纂中であるが、この新全集は、小楠への来翰をできるかぎり収集し、発翰との対応関係を明確にして、両者を一括して収録することを編集方針の目玉に掲げている。その意味で、今回の寄託措置が新全集編纂事業を大きく促進させる効果は非常に大きい。その意味で、今後、文学部日本史研究室が中心になって行う本史料の再整理作業は、極めて重要な意義を持っていることになる。

みさわ じゅん 文学部准教授

#### 史跡information

- 横井小楠記念館・四時軒  
〒861-2102 熊本市沼山津1丁目25-91  
TEL (096)368-6158  
開館 9:30~16:30  
休館 月曜(月曜休日の場合は火曜)・年末年始
- 小楠公園  
〒861-2102 熊本市沼山津4-11

